青年結社殊にシヨン會起原の說（下）

長　壽　吉

五

次に私はシヨン會起源に就いて、その歷史的環境的なる狀態と、思想の傳統に於ける狀態とに關して大略四個の要件を認め、之が前述の如き青年結社の心理に於ける、權威の否定に因る分離背反の傾向と、將來觀念に導かるる一社會構成の思想の傾向とに、合致し來るところを觀察せんと思ふ。

（其一）は十九世紀後半に於ける佛蘭西の、政治的社會的不安定、殊に之に由て誘起され、或は之を證明して表現さるゝところの、道義的不安定の存在である。今少時之等に關する主たる事件を顧みるに、一八七七年には國旗問題事件より延て、左右兩黨の爭が過激なりし總選擧の波瀾がある。以後內閣の更迭多く、中間政黨の現出益々この事情に波瀾を與へる。而かもこれと表裏となつて前後に亘る敎育制度上の異論區々たるは、信仰と道義との動搖益々甚しきものがある。一八八六年以來のブウランジエ運動の紛糾天下を騷然たらしむるに、加ふるに果して一八八八年にはパナマ瀆職事件あつて、人心を萎微せしめ、議論囂然たるに、一八九四年に於てカルノオ大統領が無政府主義者と思はるゝ者

に暗殺され、續出するにドレエフュス大尉事件あつて、更に混亂し、勞働問題は續出し、サンディカリスムは流行し、元來佛蘭西のユトピア的社會主義は、科學的社會主義を轉向せんとし、正に上下をあげて動搖するの觀がある。この狀態は實に何物かの反動、――恰もそれは新尙古主義文藝の生れたりしに似たるものを生ずべき、理由を有つのである。私の見る處に於ては、ジョルヂ・ウエールはその著書(註一)中にこれを詳かにして居らぬが、近世佛蘭西の社會運動と稱すべきものの中には、多量にこの反動に因りて生じたりしものを包含して居る。結局シヨン會起源も、この中に於て考へらるべきものに屬するのである。

注意を失ふべからざるものは、この狀態の中に於て、反猶太主義の普及のある事である。獨逸に於けるデュリングの反猶太論、ことにその民族的反猶太主義と稱せらるゝもの(註二)の影響が顯著なる、エドアル・ドリユモンの「猶太化せる佛蘭西」(註三)が公にされたのは、一八八一年で、この流れに在る反猶太運動がドレエフュス事件前後に、殊に軍隊內に流布したる「リイブル・パロル」誌に合流したものに、アベ・ガルニエの下に在る舊敎々會的小團體、「ユニオン・ナシオナル」の發行したる「佛蘭西人民」誌がある(註四)。

六

(其二)は法皇レオ十三世の社會問題に對する態度、及び之に際して發表されたる思想の影響である。

實に法皇はは當代の指導的人格で、確固たる信念と明晰なる思考とを、最も巧妙に處理した人であつた。私は嘗て「史淵」誌上に、獨逸文化論諍に際しての法皇の指導が、ビスマルク政策を顏色なからしめた事を說いたが、當時の佛蘭西に於ける舊敎的社會哲學思想も、僧職敎會の社會事業も、多くは法皇の指導に導かれたもので、セルクル・デチウドの研究討議の對象は、多くは法皇敎書の內容である。ラコルデエルの所謂「勞働は人間的活動と他物にあらず」は、恒に法皇の胸中に在る言で、勞働の分配の良否は則ち社會秩序の善惡、社會の幸不幸なりと信じ、幾多社會問題の續出は、彼の心を動かすこと甚しく、先づ自から進んでこの困難を解決し、以て淸明なる神の意に從つての社會を開かむと試みた。

法皇は一八八八年八月、合衆國に於ける「ナイツ・オブ・レーバア」の事業を、自由寬容することを宣言した外、之に頻して、或はウエスミンスタア僧正マニングの、ロンドン船渠勞働爭議仲裁を祝福し、或はウインのフオグルザンクの祝賀會の喜悅の意を送り、或は多數の勞働者代表をヴアチカン宮に引見する等々を行ひ(註五)、既に一八七八年卽位當年に於て、「近代社會の過誤に關する敎書」を發して、基督敎と社會改造との關係を說きたるをはじめ、一八八四年敎書、一八九二年敎書に於ても、僧職に社會問題に就て敎示し、一八九一年には「勞働者の狀態に關する敎書」を發し、一八九八年敎書に民主主義と信敎との關係を敎示し、一九〇一年敎書に民主主義の解釋を說いて居る。斯くの如きはルプレヱ

の「レフオルム・ソシアル」派、又はド・トウルヴイルの「シアンス・ソシアル」派の運動に影響し、同時に彼等の社會哲學思想の門下に、多くの影響を與へたる事、亦言ふを須ひず。果して一八九二年八月の法皇敎書「不安の環境に在りて」は、最舊のセルクルと考へらるゝ「セルクル・デユ・リユクサンブウル」に於て、アベ・イルランが之を敷衍して演說する處となり、尠からざる感激を青年等に與ふる處となつた。

從來の勞働組合に類する團體の中に在りても、亦純然たる研究を主とするアンスティテユシオン・カトリツクの中にありても、青年の間には法皇敎示に準ずる結社を創むる氣運が濃くなつた。一八九四年ボウル・ルノオダンの創刊せる「ション」誌は、將來一八九九年にション會の機關誌となつたが、其の第一號は全く「勞働者の狀態に關する敎書」に由る、極めて不明瞭ながらも其の主張であつた。其他前述のガルニエの「佛蘭西人民」誌の團體、リョンの「自由佛蘭西」誌の團體、又マリウス・ゴナンの「クロニツク・ソシアル」誌の團體の如きもの之に類す(註六)。

七

(其三)は自由舊敎論ことにフレデリツク・オサナムの所論の傳統の、存在である。彼は、要するにその思想に於て尙古主義的であり、且民主主義的であるもので、一面に於て「尙古主義則國家主義」の一派の思想は、こゝに源流を有すると同時に、又「舊敎的民主主義」と稱せらるゝものの多くが、こゝに

出發する。彼は其のコンフエランスに於て、「舊教の眞實を、歴史的宗教的並に道德信仰の古代に於て、論證する」とともに、舊教と社會改造の不可離の關係を指示し、その死一八五三年に於ては、三〇年代舊教復興の亞流ネオカトリツクとは、別途の後繼者を多く作つて居た(註七)。一八五二年ソルボンヌ倫理學の擔當者アルフオンス・グラトリイの如き、その以前に巴里スタニス高等校、則ちシヨン會誕生地の主宰である。グラトリイは生徒に向つて曰く、「汝等は世を救ひ改むる神聖なる義務を有す汝等は世上百般の事物の發展に責務を有す」と。彼の一八七六年著「社會的革新の根元論」は、理論主義、科學主義に反對し、神の啓示に導かれて道義的完成の社會を作るを說き、人々の道義的自覺が社會組織革新の中心たることを說いたものである(註八)。

一八八一年「人道の基本的規準」を公にせるフレデリク・ルプレエも、亦社會道德の進步を以て、社會福利の根元なりと考へ、而してこの進步は等しく神の啓示に導かるゝに在りと考へる。彼は社會制度の必須條件は、家族と宗教と資產と救濟とに在りとし、新しき社會組織は權威と傳統の變革に存せずして、その改善則ち道德の向上、責務の自覺、要は個人の改革に存す。人類の進步は道義人倫に係り、家族は高き社會的使命を盡すべく、個人は相互の愛のみならず、正義の社會的義務を行ふべしと敎へて居る(註九)。これらの人々の外に、オウギユスタン・コシヤン、アルベエル・ド・マン、ポウル・リボ等々の青年の將來に對する考慮、殊に舊教々會は民主主義を祝福し、且基督の前に凡ての人は、平

等友愛自由にして、民主主義はこの原則に、その花を開くと敎へたるアベ・イルランの「敎會と世紀」の著作の如き、總てこれ青年に對する將來の期待、ネアニオスコピイの表現にして、以てション會の如きが生れ來れる環境を作つたのである(註一〇)。

「神の畦に豐なる收穫」を志して、スタニスラス校よりセルクルを生じ、コンフエランス・ド・ラ・クリプトと稱するもの行はれ、一八九九年に至つてルノオダンの「ション」誌を併せ、一九〇五年ACJF組織せらるゝに至りて、殊にその運動を盛にした。「神と祖國」誌第一號は、サングニエとルノオダンとの共同にて、一八八五年に發刊されたるものと私は考へる。サングニエは曰く、「萬能の力は吾等の上に位せり、これクリストなり」と。又曰く「一般福利の最高最大なる表現クリスト」と。而してその意に由る民主主義的社會は、國民の中に原動的集團に由りて保持さる可しと彼が考へた事は、既述の如くである。

八

(其四)は國家主義思想の勃興に伴つた事である。この事に就ては私にとりて、猶多くの研究を要するものと思はれるが、一八九二年の「ユニオン・プウル・テクシオン・モラル」組織の氣運が、理智の風靡に反對して情意を明かにし、以て現在社會の弊害を認めらるゝものを、尙古的傳統の回想に由りて矯正せんと志したりし事が、九〇年代に於ける國家主義的思潮の勃興に、與りて力ありし事を知る人

は、是の「ユニオン」とシヨン會との關係に就いて、アリエの著書に記す處を見る時には、シヨン會起源更に一般青年結社の起源と、國家主義思想との關係を窺知するに至るであらう。アリエの記すところを見るに、「ユニオン」の創立者たるデジャルダンの如きは、ラ・クリプトの言論に興味を有し、且つ之に關して論議するところの人の中に在つた。一九〇一年三月の「ル・シヨン」誌には、デジャルダンは既に古きシヨンの友人であつたと記してある(註一一)。かのルノオダンとサングニエとの初期の合作の雜誌が、「神と祖國」と稱した事は、既に述べた如くである。この事は既述の獨逸青年社會主義者會の發展の一階段に、ルール事件の興奮ありし事をも想起せしむ。

たとへその政治上の主張を異にするとは謂へ、モウリス・バレスとシヤール・モウラスとが、等しく佛蘭西の傳統を、國家主義の上に主張することは、ともに尙古主義或は傳統主義にして、この主張は「ユニオン」の尙古的宗敎的なるものと、密接なる關係に存し、又バレスがその根據を置き、一轉してモウラスの思想を多量に有するに至りたる、「アクシオン・フランセイズ」一派にも、舊敎的思想の深く且大なるものを見る事は、これらの國家主義思想の勃興は、則ち舊敎的思想の勃興に傍らすることを知らしむるものである。是場合吾々は、尙古主義にして同時に舊敎主義なりと、自ら言へるフエルヂナン・ブリユヌチエを考へ、更に反猶太思想と國家主義との關係を考へ、殊にバレスが民主主義を以て、「將來の最大なる創造者」と形容せる事を考へる(註一二)。これらの複雜なる關係は、之を既述

の(其一)の條件に照し、(其三)の條件を參照して、國家主義の勃興が必ずやシヨン會起源に關するところ、多大なるべきを思はしむるに充分である。

近代佛蘭西の國家主義の內容が、複雜にして、殊に所謂「二つの佛蘭西」、則ち舊敎的佛蘭西と世俗的佛蘭西とを兼ね併することは、興味ある現象であるが、シヨン會も亦この點に於て、その起源が觀察される。こゝに其の思想的矛盾も、更に又その思想的渾一も觀察されるのである。私は終りに、前紀アリエ著前記書頁一〇三の、一節を引用して說明に代へたく思ふ。曰く、「シヨン誕生は一八九四年なり。されども一八九三年、法皇回敎書「勞働狀態に關する」もの及び「佛蘭人への書柬」の際、社會舊敎運動及びネオ基督敎運動の結果生じたる、動搖の中に抱懷されたるものなり。當時靑年等は、その幼年時代に、宗敎家等が追放され、その學校が閉鎖さるゝを見たり。彼等はこの變化により、舊敎徒間の沒落の徵にいたく心を動かされざるを得ざりき。過去の決定的忘却と、彼等の希望とは、社會の樂觀的風潮により支配されつゝ、すべて將來に向ふ。而して大なる專念事は宗敎々會と世紀とを調和せしむる事なりき。佛蘭西大學に屬し國家に依る所なれども、舊敎生徒と共に宗敎指導に服する所の、スタニスラス高等校則ち僧職と大學制度との合する所は、由來佛蘭西を分ちし二精神の間の、融合の傾向が作らるゝ機緣の生ずる場所となれり。シヨン會の生じたるはこの所なり云々」と。(終)

註

1) G. Weill: Histoire du mouvement social en France. 1924.

2) Eugen Duehring: Die Judenfrage als Rassen-und Kulturfrage. 1880.

3) Edouard Drumont: La France juive. 1881.

4) "Livre parole", Abbé Garnier: "Le Peuple francais."

5) F. Mourret: Les Directions politiques, intellectuelles et sociales de Léon XIII. 1920.

6) Abbé Irland: L'Eglise et le siécle. 1894.

"Cercle du Luxembourg.", "La France libre.", Marius Gonin: "Chronique sociale."

7) Les Meilleures pages d'Ozanam. Introd. d'Eug. Labelle. 1921.

8) Alphonse Gratry: Les Sources de la régénération sociale. 1876.

9) Fréd. Le Play: La Constitution essentielle de l'humanité. 1881,

Paul Ribot: Exposé critique des doctrines sociales de M. La Le Play. 1885;

10) Augustin Cochin, Albert de Mun, Paul Ribot.

11) N. Ariés: Le Sillon et le mouvement démocratique. 1910. p. 119.

12) M. Barrès: Outre mer. 1894.